



やまなみ

山形市立大曾根小学校
学校だより
令和3年9月28日
No. 9 校長
太田 千春

令和3年度全国学力・学習状況調査の結果から

令和3年度の全国学力・学習状況調査の調査結果が公表されました。本調査は、児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てること等を目的に、第6学年児童を対象に実施されるものです。本校は、国語、算数ともに全国平均正答率を下回る結果となり、課題が残りました。調査結果を受け、全職員で調査問題や児童の解答状況を分析して児童のつまづきを把握するとともに、今後の教育指導の充実に向けて、授業改善の具体策を検討いたしました。

【国語の結果概況】

- 国語の平均正答率は、全国平均を下回っている。
- △ 領域別では、「読むこと」の平均正答率が最も低い。
- △ 思考・判断・表現を観点とする問題の平均正答率が低く、全国平均との差が知識・技能を観点とする問題よりも大きい。
- △ 記述式の問題の平均正答率が低く、全国平均との差が他の問題形式よりも大きい。
- 学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことはできている。
- ▲ 目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約することに課題がある。
- ▲ 目的や意図に応じて、理由を明確にしながら、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題がある。

国語では、第3学年及び第4学年の「読むこと」の領域で指導する「目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約する」ことに課題が見られました。実際に問われたのは次のような問題です。

相川さんは、【資料】を読み、面ファスナーが宇宙でも使われていることについてまとめています。面ファスナーは、国際宇宙ステーションの中でどのように使われていますか。次の条件に合わせて書きましょう。

- 〈条件〉 ○ 面ファスナーのよさを取り上げて、国際宇宙ステーションの中での使われ方について書くこと。
○ 【資料】から言葉や文を取り上げて書くこと。
○ 五十字以上七十字以内にまとめて書くこと。

問題では、学級で身近にある便利なものについて調べており、相川さんは、面ファスナーを選んだという場面が設定されていました。相川さんは、面ファスナーの便利さを伝えるため、【資料】で説明されている「面ファスナーのよさ（面ファスナーはしっかりとくっつき、かん単にはがせる）」と、「国際宇宙ステーションでの使われ方（身の回りの全ての物の固定に使われている）」を見つけて要約することが必要です。この問題に対し、「面ファスナーは、無重力状態でも物をくっつけることができるため、国際宇宙ステーションで面ファスナーが使われている。」と解答した児童は、そのどちらの要件も書いていません。「面ファスナーの便利さを伝える」という目的を意識して、文章全体から必要な部分を選び、内容を端的に説明することができないことがわかりました。

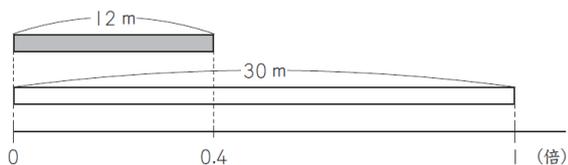
同じ文章を読んでも、読み手の目的によって内容の中心となる語や文は異なります。学習指導にあたっては、相川さんの学級のように、「身近にある便利なものを紹介する」といった目的のはっきりとした言語活動を設定した単元を構成することや、その目的に応じて、必要な情報を見付ける学習活動を充実させていくことを全職員で確認しました。

【算数の結果概況】

- 算数の平均正答率は、全国平均を下回っている。
- △ 領域別では、「測定」の平均正答率が最も低い。
- △ 思考・判断・表現を観点とする問題の平均正答率が低く、全国平均との差が知識・技能を観点とする問題よりも大きい。
- △ 記述式の問題の平均正答率が低く、全国平均との差が他の問題形式よりも大きい。
- 棒グラフから、数量や項目間の関係を読み取ることはできている。
- ▲ 二つの道のりの差を求めるために必要な数値を選び、求め方を記述することに課題がある。
- ▲ 小数を用いた倍についての説明を解釈し、他の数値の場合に適用して、基準量を1としたときに比較量が示された小数に当たる理由を記述することに課題がある。

算数では、第4学年の「数と計算」の領域で指導する「基準量を1としたときに、比較量が示された小数に当たる理由を説明する」ことに課題が見られました。実際に問われたのは次のような問題です。

30mを1としたとき、12mが0.4にあたるわけを、0.1にあたる長さがわかるようにして、言葉や数を使って書きましょう。



この問題に対して、「30mを1としたとき、0.1にあたる長さは3mです。12mは、3mの4つ分になるので、30mを1としたときの0.4にあたります。」のように正答できた児童は約半数でした。

「倍」の学習は、第2学年において、「(一つ分の大きさ) × (幾つ分) = (幾つ分かに当たる大きさ)」と捉え、幾つ分を何倍とみる「乗法」から始まります。第4学年で学習する小数を用いた「倍」についても、整数を用いた倍の意味を捉え直し、基準量を1とした

ときに比較量が幾つ分に当たるかという意味を理解できるようにすることが重要です。「30mを1としたとき、0.1にあたる長さは3m」であることを基に、「30mを1としたときの0.4」にあたる理由を、「12mは、3mの4つ分になるから」のように説明することのできる論理的思考力は、一朝一夕に身に付くものではありません。各学年の学習内容に応じて、言葉や数、図などを用いながら説明する学習活動を充実させていくことを確認しました。

学習状況調査では、国語、算数ともに「学習はよくわかる」と回答していました。さらに、「自分には、よいところがあると思いますか。」という質問に対しても、肯定的な回答が8割を超えるなど、自尊感情が育まれていることがわかりました。一方で、家庭学習時間は、1日あたり「30分以上、1時間より少ない」児童が最も多く、やや課題が見られました。また、テレビゲーム等をしている時間は、1日あたり「3時間以上、4時間より少ない」児童が最も多く、家庭学習を阻害する要因の1つになっていると考えられます。この点については、8中学区で取り組んでいる「電子メディア・コントロール」の取組とも連動させながら、児童の家庭学習の習慣形成の指導にも力を入れていきたいと考えております。

本校では、学校全体で育成を目指す資質・能力を次の3つとし、国語や算数などの教科学習のみならず、総合的な学習の時間や外国語活動、道徳科、学校行事等の特別活動に至るまで、それぞれの本質を踏まえつつ、全ての教育活動をとおしてこの資質・能力の育成に努めております。

- 身に付けた知識や技能を学習や生活に活用することができる。(知識及び技能)
- 根拠や理由を明確にして、自分の考えを表現することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- 互いのよさを認め合い、自他を大切にしようとする。(学びに向かう力・人間性等)

この度の全国学力・学習状況調査の調査結果は、本校児童が身に付けている学力の特定の一部ではありますが、「根拠や理由を明確にして、自分の考えを表現することができる」資質・能力の育成に、引き続き注力していく必要があることを再確認したところです。やまなみNo.7で紹介したような校内授業研究会を中心に研修を重ね、確かな学力を育成することのできる授業改善に努めてまいります。